2016年12月25日

福音書からのメッセージ

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。
（ヨハネによる福音書1章14節）

「言(ことば)が肉となる」ということについて、今日は考えてみたいと思います。「言」は日本語では、人の口から発せられるものという意味ですが、聖書の中では違うニュアンスも持っています。例えばこの言葉を、「神さまの意志」と訳した方もおられます。確かに創世記の最初にある天地創造は、神さまの言葉からスタートします。「光あれ」という言葉によって、神さまの意志が世界に示めされたわけです。

神さまの意志が肉となった出来事が、クリスマスです。ただ肉となったといっても、単に実態のないものが触れるようになったということではありません。

聖書では、霊と肉という分け方が出てきます。簡単にいえば、霊は清く、肉は汚れているということです。肉とはわたしたちの欲望や汚い部分、人には見せたくないどろどろしたところ、そのようなことなのかもしれません。

その肉に、神さまから遣わされた言がなったのです。肉になるということは、罪深い者になることを意味します。つまりわたしたちと同じようになられるのです。

なぜ神さまは大切な独り子をそうされたのでしょうか。それは、その言であるイエス様が、わたしたちの間に宿るためです。わたしたちはどこにいるのでしょうか。清いところですか、汚れているところですか。神さまのすぐそばですか、神さまから遠く離れたところですか。

神さまが遣わされたイエス様は、罪の中にいるわたしたちのために、そして自分の力で暗闇から抜け出ることのできないわたしたち一人一人のために、わたしたちの間に宿られました。神さまから遠く離れてしまったわたしたちが神さまの大切な子どもとして歩んでいくことができるように、わたしたちの元に来られたのです。

イエス様の誕生は2000年前に、遠いユダヤの国に起こったたった一回の出来事ではありません。今、わたしたちの中にも起こっている出来事なのです。イエス様がわたしたちと同じように肉となり、そしてわたしたちの間に宿られたという出来事、さらに今も共にいてくださるということ、それが今もずっと続いているクリスマス物語なのです。

イエス様はわたしたちに寄り添い、倒れそうになったときには手を貸してくださり、歩けなくなったときには背負ってくださり、涙が止まらないときには一緒に泣いてくれ、祈ることすらできなくなったときには、一緒に祈ってくださいます。そのお方がお生まれになったのです。

大丈夫。わたしがいつも一緒にいるから、安心しなさい。すべてをわたしに委ねなさい。その言葉に耳を傾け、イエス様を心に受け入れてください。

クリスマス、おめでとうございます。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/